

実在する社会集団の性質の検討

—— 集団同一化, 相互依存性, 外集団脅威に着目して ——¹⁾

中 川 裕 美

要旨: 本研究の目的は, 実在する社会集団 (実在集団) における外集団脅威が, 社会的アイデンティティ理論 (SIT) で説明される心理メカニズムの影響力を強める要因であるか否かを検討することである。したがって, 本研究では外集団脅威尺度を作成し, 外集団脅威を経験しやすい脅威集団と非脅威集団を選出した上で SIT の心理メカニズムへの影響力を検討する。研究 1 では, 大学生 54 名を対象に, 参加者が所属する集団の同一化, 相互依存性, 外集団脅威の観点から各集団の性質を検討した。外集団脅威尺度の探索的因子分析を行った結果, 2 因子が抽出された。研究 2 では, 大学生 106 名を対象に研究 1 で選出した脅威集団と非脅威集団 (国, 大学, 音楽ファン, 部活・サークル) の性質と外集団脅威尺度の因子的妥当性を検討した。研究 1 と 2 の結果, 外集団脅威尺度の 2 因子それぞれの信頼性 (内的整合性) は確認できたが, いずれもモデルの適合度は十分ではなかった。さらに, 集団同一化 (SIT の先行要因) と外集団脅威との間には有意な相関関係が見られず, SIT の心理メカニズムの影響力を調整する要因を特定できなかった。

キーワード: 実在集団, 集団同一化, 相互依存性, 外集団脅威

目 的

社会には様々な集団 (実在集団) が存在し, 人は自分の所属する集団 (内集団) には協力的, 所属しない集団 (外集団) には非協力的に振る舞うことがよくある。この現象を内集団ひいきといい, 野球チームのファン (Nakagawa, Yokota, & Nakanishi, 2021), 従業員のグループ (Terry & O'Brien, 2001) などで確認されている。内集団ひいきがなぜ生じるかについては, 社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory: SIT; Tajfel & Turner, 1979) と閉ざされた一般互酬仮説 (Bounded Generalized Reciprocity hypothesis: BGR; Yamagishi & Kiyonari, 2000) からの説明がある。SIT では自己肯定感を得たいという基本的な欲求から自己と同一化した内集団を外集団よりも優越させるため (Tajfel & Turner, 1986), BGR では他の内集団成員に協力をすれば巡り巡ってその協力が自身に返ってくるという互惠性を期待するため, 内集団ひいきが生じると説明される (Yamagishi & Kiyonari, 2000)。SIT は集団間, BGR は集団内の関係性を重要視する点に特徴がある。SIT と BGR の妥当性は, 実験室で人工的な集団間状況を再現する最小条件集団 (Tajfel, Billig, Bunday, & Frament, 1971) を対象として検討されてきた (清成, 2002; Tajfel & Turner, 1979, 1986; Yamagishi & Kiyonari, 2000; for a review, see Böhm, Rusch, & Baron, 2020)。近年の最小条件集団を対象とした研究では, SIT と BGR で説明される心理メカニズムの働きは相互背

反的ではなく、相互依存性や外集団脅威があるか否かなどの状況に応じてそれぞれが独立して働くとの主張がある (Stroebe, Lodewijckx, & Spears, 2005; 横田・結城, 2009)。しかし、实在集団を対象として、SIT と BGR の外的妥当性を検討した研究が少なく (牧村・山岸, 2003; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi et al., 2005), SIT と BGR の心理メカニズムが両立して働きうるか否かの検討が不十分であった。

野球ファンの内集団協力

上述の限界点を解決するため、中川・横田・中西 (2015, 2019) は、野球ファンを対象に集団所属性の知識操作 (神・山岸, 1997) を導入した場面想定法実験で援助行動 (内集団協力) を測定し、両理論の妥当性を検討した。集団所属性の知識操作とは、自分と相手の集団所属性が互いに分かる、自分だけ一方的に分かる、互いに分からないという知識を操作し、BGR の先行要因である互恵性を期待できるか否かを操作するものである。互いに内集団であることが明確な場合には、協力に対する互恵性を期待することができる。一方、自分だけ相手が内集団成員であると分かる状況では互恵性は期待できないが、集団と自己の同一化は生じる。互いに分からない状況では、同一化も互恵性の期待も生じない。つまり、BGR の心理メカニズムが働くなら、互いの集団所属性分かる状況で協力的になり、SIT の心理メカニズムが働くなら、一方的に相手が内集団成員と分かる状況では互いに分からない状況よりも協力的になるといえる。この知識操作を導入することで、両理論の心理メカニズムが働いているか否かを判別することが可能になる。

中川らの場面想定法実験から、野球ファンにおける内集団協力は、SIT と BGR の心理メカニズムが両方とも働くことで生じることが明らかになった (中川他, 2015)。さらに、協力のコストを明示すると BGR の心理メカニズムの影響力が強くなることが示され (中川他, 2019)、行動実験でもその結果が再現された (Nakagawa et al., 2021)。一方で、SIT の心理メカニズムの影響力を調整する要因は明らかになっていない。なぜなら、中川らは实在集団における交絡要因を抑止する目的から SIT で重要とされる外集団の存在を明示せず、競争的な集団性質 (Rabbie, 1982) を持つ野球ファンは、デフォルトで外集団を想起するという前提で検討してきたからである。さらに、外集団の存在を明示して内集団ひいきを測定した中川・横田・中西 (2018) でも、SIT の心理メカニズムの働きを変化させる要因を特定することはできなかった。横田・結城 (2009) の研究では、内集団の存在を脅かす外集団からの脅威を感じると SIT に基づく心理メカニズム (集団間の差を拡大する動機づけ) が働くことが示されている。この知見を踏まえると、外集団が存在するだけでなく外集団脅威を知覚することが、SIT の心理メカニズムの影響力を調整する要因になりうると思った。また、中川らの研究は实在集団の対象が野球ファンに限られていることから、实在集団の結果として一般化することが難しい。したがって、本研究では、野球ファン以外の实在集団を対象に、外集団脅威が SIT の心理メカニズムの影響力を強める調整要因になるか否かを検討する。

集団間脅威理論

外集団脅威とSITとの関連性は、集団間脅威理論 (Intergroup Threat Theory: ITT; Stephan, Ybarra, & Rios, 2016) でも示されている。ITTによれば、人々は自分の所属する社会集団 (内集団) を重要視しており、それ以外の他の集団 (外集団) が内集団に危害を加えたり破壊したりする勢力を持つ際に外集団脅威を感じる。さらに、脅威がある場合には内集団に甚大な被害が生じる可能性が高く、集団の財や人的資源など失うものは大きい。したがって、実際に脅威が存在するかどうかにかかわらず、人々は外集団からの脅威をデフォルトで知覚することがあるという (潜在的な人種バイアスなど)。外集団脅威を知覚するには集団間の区別が前提にあるため、集団同一化が強いほど内集団の価値や信念を重要視し、脅威を感じやすいと考えられている (Stephan & Stephan, 2017)。また、外集団脅威には、象徴的な脅威 (内集団が重要視する価値・モラル・信念の破壊) と現実的な脅威 (資源の搾取などの実質的な被害) の2種類が存在すると主張されている。しかし、ITTにおける外集団脅威は移民 (e.g., van der Veer et al., 2013) などの特殊な集団の文脈で扱われることが多く、実在集団において汎用的に使用できる外集団脅威尺度の開発はなされていない。したがって、実在集団の種類に左右されず、外集団脅威を測定できる尺度を作成する必要があると考えられる。

本研究の目的と概要

本研究では、Rabbie (1982) と Stephan et al. (2016) を参考に、競争的な状況認知、現実的脅威、象徴的脅威を測定できる外集団脅威尺度を作成する。外集団脅威尺度の基準関連妥当性を検討するため、外集団嫌悪 (van der Veer et al., 2013) と外国人嫌悪 (Frindte, Funke, & Waldzus, 1996) も同時に測定する。研究1では、まず参加者にとって積極的な関わりのある集団を2つ挙げてもらい、集団に対する同一化、相互依存性、外集団脅威、外集団嫌悪をそれぞれ測定する。その結果を基に、脅威を経験しやすい脅威集団と経験しにくい非脅威集団を選出し、外集団脅威尺度の因子的妥当性を検討する。研究1と2を通じて、外集団脅威を知覚しやすいほど集団同一化の影響が強くなるか否かを検討する。したがって、本研究では外集団脅威がSITの心理メカニズムの影響を強めるという仮説を立てた。仮説が支持されるなら、外集団脅威と同一化の間には正の相関関係が見られるだろう。

研 究 1

方法

参加者及び手続き 本調査は2020年11月27日から12月11日にかけてGoogle Formを使用して行われた。広島県内の大学生54名 (男性13名、女性40名、不明1名、平均年齢20.55±0.89歳)

が参加した。参加者には謝礼としてコースクレジットを付与した（目安：100点満点中2点）。

倫理的配慮 本研究に関するインフォームド・コンセントを行い、同意する者のみを調査対象者とした。その際に、「不快な思いをしたり、都合が悪くなったりした場合は、調査中いつでもWeb画面を閉じて参加を取りやめることができる」ことを文書で説明し、質問項目の回答に不快感を覚える危険や不利益が最小化されるように配慮した。調査終了後には、デブリーフィングとして本研究の目的と意義を丁寧に説明した。コースクレジットの導入に関しては、日本の大学では一般的ではないことも多い。しかし、松井・水野（2013）はクレジットの不足だけが原因で成績評価が不合格となる学生は少なく、むしろ参加者の立場を経験するための心理学教育として適した制度であると主張している。本研究は、参加のインセンティブとしてコースクレジットを用いる適切性を説明し、広島修道大学の倫理審査委員会での承認を経てから実施した（承認番号：2020-0006, 2020-0015）。クレジットを付与するため、参加者には、調査終了画面に表示されるURLから別のWebページにとび、学籍番号を入力するように求めた。調査の回答と学籍番号の情報は対応していないため、個人情報適切に保護されていた。

質問項目 参加者にはまず、「私は〇〇の一員です」の〇〇に当てはまる集団名を5つ挙げてもらった。その中で積極的な関わりがある集団を2つ選び、質問項目の〇〇に選択した集団名を当てはめて、以下の項目にそれぞれ5件法で回答した（1. 全くそう思わない～5. 非常にそう思う）。集団同一化13項目（cf. Grieve & Hogg, 1999; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009）、相互依存性4項目（神・篠塚, 1996）、外集団脅威15項目（Rabbie, 1982; Stephan et al., 2016）、外集団嫌悪²⁾5項目（van der Veer et al., 2013）に回答した。その後、外国人嫌悪5項目（Frindte et al., 1996）とフェイスシート（年齢、学年、性別）への回答で調査が終了した。質問項目をTable 1に示す。

結果

以下の分析は、HAD17_105（清水, 2016）とR ver. 4.1.0（R Core Team, 2021）を使用して行った。参加者が所属する集団を5つ挙げた結果、3つ目の集団までは大学、学部・学科など自身の所属に関わる集団カテゴリがよく挙げられた。4つ目の集団以降は、日本人、広島県民、血液型などの地域や属性に関わる集団カテゴリが挙げられることが多かった。合計24種類の集団が挙げられたが、以下の分析では、参加者が積極的に関わっている2つの集団それぞれの性質を検討する。

各尺度のクロンバックの α 係数を算出したところ、十分な内的整合性が得られたため、全項目それぞれを合算し、同一化得点（1つ目/2つ目： $\alpha=.92$:min13-max65）、相互依存性得点（1つ目： $\alpha=.66$, 2つ目： $\alpha=.48$:min4-max20）、外集団脅威得点（1つ目： $\alpha=.91$, 2つ目： $\alpha=.95$:min15-max75）、外集団嫌悪得点（1つ目： $\alpha=.58$, 2つ目： $\alpha=.78$:min5-max25）とした。相互依存性と外集団嫌悪ではやや低い値が算出されたが、1つ目の集団と2つ目の集団における α 係数の変動が大きかった。このことを考慮すると、尺度の問題ではなく、様々な種類の集団が含まれている

Table 1. 質問項目

集団同一化	
1.	自分が典型的な〇〇の一員であるとされたら、気分がいい
2.	〇〇に深く関わっていると思う
3.	自分が〇〇の一員であるという事実が分かると、幸せだと思う
4.	自分は、他の〇〇の人と似ている
5.	〇〇が好きだ
6.	自分は〇〇に合っていると思う
7.	他の〇〇の人との一体感を感じている
8.	自分にとって、〇〇は重要だ
9.	自分を定義する上で、〇〇の一員であることは重要だ
10.	自分は〇〇の中の一員である
11.	〇〇の一員であることに満足している
12.	〇〇の一員であることが心地よい
13.	〇〇の一員であることは自信になる
相互依存性	
1.	〇〇の一員であれば、〇〇の人に親切にすれば必ず自分のためになる
2.	〇〇の間では、自分だけ得をしようとして行動すると結局は損をしてしまうことが多い
3.	〇〇の人同士は、お互い持ちつ持たれつである
4.	〇〇の人としてうまくやっていくためには、他の人と助け合わなければならない
外集団脅威 (1~4: 状況認知, 5~10: 現実的脅威, 11~15: 象徴的脅威)	
1.	グループの目的の達成に向けてグループ内のメンバーと協力して、他のグループと競争したりすることがある
2.	自分のグループと他のグループが互いに不満を抱くようなやりとりをする関係にある
3.	自分のグループと他のグループの間には勝ち負けが存在する
4.	自分のグループと他のグループには勝ち負けがないような関係である (逆転項目)
5.	自分のグループが他のグループの脅威になっている
6.	〇〇にいと、他のグループが自分たちを負かそうとする状況になることが多い
7.	〇〇では、グループ全体の勝ち負けを考えることが多い
8.	〇〇にいと、他のグループが何かしら自分たちと張り合ってくると思うことが多い
9.	〇〇では、グループの掲げる目的が、他のグループに邪魔されたり、妨げられたりすることが多い
10.	〇〇では、常に他のグループからの脅威を受けていると感じることが多い
11.	〇〇グループの価値観を他のグループが否定してくる
12.	〇〇グループの価値観は他のグループに受け入れられない
13.	〇〇グループの価値観と他のグループの価値観は反するものである
14.	〇〇グループにとって重要な価値観であるにもかかわらず、他のグループの人たちが価値観を変えようとしてくる
15.	他のグループの人たちが、自分たちの価値観を押し付けてくる
外集団嫌悪	
1.	新しい人がグループに入ってくることを拒んだり拒否したりすることが難しい
2.	グループに入ってきた新しい人たちとは気軽に交流することは難しい
3.	グループに入ってくる人が増えていくことで、グループの中でのライフスタイルが悪い方向に変わってってしまうことを危惧している
4.	新しく入ってくる人たちが、このグループの利益になることを第一に考えるかどうかは疑わしいと思う
5.	グループに新しい人たちが増えることで、グループでの文化が失われていくのではないかと心配している
外国人嫌悪	
1.	日本に出稼ぎにきている外国人は、できる限り国外に追放すべきだ
2.	一時的に日本に滞在している外国人も、選挙に投票できる権利を持たせるべきだ (逆転項目)
3.	日本には、日本人だけが住むべきだ
4.	日本では、外国人の政治亡命者の保護を制限すべきではない (逆転項目)
5.	日本人と外国人の結婚は、できる限り制約をなくすべきだ (逆転項目)

ことから生じた弊害という可能性もある。したがって、やや低い値ではあるが、本研究では両尺度の合計得点を指標として用いた。Table 2 に2つの集団ごとの同一化、相互依存性、外集団脅威、外集団嫌悪の合計平均と標準偏差を示す。外国人嫌悪得点 ($M=10.52, SD=2.83$: min5-max25) の α 係数³⁾は非常に低かった ($\alpha=.36$) ため、主要な分析には用いなかった。

因子分析 次に、外集団脅威尺度15項目について、各項目の得点分布を検討したところ、いずれの項目についても極端な外れ値はなかった (Table 3 と 4 を参照) もの、全体的に平均値が低い傾向にあった。尺度の因子構造を検討するため、2つの集団それぞれで探索的因子分析 (最

Table 2. 集団ごとの同一化、相互依存性、外集団脅威、外集団嫌悪の合計平均と標準偏差

集団の種類	人数	同一化		相互依存性		外集団脅威		外集団嫌悪	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 大学	5	45.00	8.86	15.80	2.49	25.80	11.82	11.00	4.42
学部, 学科	15	43.40	8.45	14.40	3.22	23.60	8.06	10.92	2.19
日本人	1	40.00	-	14.00	-	36.00	-	16.00	-
部活, サークル	20	55.35	7.21	15.70	2.68	34.10	9.90	10.65	3.45
女性	1	63.00	-	14.00	-	21.00	-	12.00	-
音楽, 芸能, アイドルファン	5	57.20	2.68	16.60	2.51	35.60	10.09	14.80	3.63
趣味, 娯楽	2	48.00	22.63	11.00	7.07	50.50	6.36	11.00	1.41
バイト	3	51.00	6.24	17.00	3.46	23.00	4.36	10.67	1.53
飲食嗜好	1	64.00	-	16.00	-	19.00	-	7.00	-
交流関係, 恋人の有無	1	53.00	-	19.00	-	20.00	-	9.00	-
2 大学	9	35.89	9.75	12.33	3.24	26.78	12.40	9.78	4.74
学部, 学科	6	51.00	7.85	14.17	2.56	26.00	8.41	10.33	3.98
日本人	4	46.50	7.85	15.00	2.58	45.75	7.09	13.25	4.92
部活, サークル	5	49.20	7.22	17.20	0.84	29.40	13.81	15.60	5.81
女性	2	35.50	6.36	12.50	0.71	29.00	16.97	7.50	3.54
広島県民 (出身地)	2	44.00	2.83	14.00	1.41	22.50	10.61	8.50	3.54
音楽, 芸能, アイドルファン	1	64.00	-	16.00	-	39.00	-	19.00	-
アニメファン, オタク	2	52.00	1.41	17.00	1.41	25.00	11.31	16.00	-
〇〇好き (小説, 料理など)	2	58.50	3.54	11.00	1.41	21.00	-	6.00	1.41
好きな場所, もの	1	60.00	-	14.00	-	22.00	-	6.00	-
バイト	8	48.88	8.66	16.00	2.27	26.13	7.99	12.63	3.93
男性	1	31.00	-	14.00	-	42.00	-	16.00	-
家族	3	56.00	5.57	16.67	1.53	22.67	6.66	18.67	1.53
飲食嗜好	1	38.00	-	15.00	-	73.00	-	8.00	-
ゼミ	2	51.50	14.85	14.00	2.83	17.00	2.83	9.50	2.12
不明	1	44.00	-	10.00	-	37.00	-	13.00	-
服装	1	29.00	-	14.00	-	15.00	-	12.00	-
交流関係, 恋人の有無	2	56.00	5.66	16.00	-	20.59	4.95	10.50	7.78
カープファン	1	39.00	-	11.00	-	60.00	-	10.00	-

尤法、プロマックス回転)を行った⁴⁾。因子数は、固有値の減衰パターン(1つ目: 6.998, 2.270, 1.097^{***}, 2つ目: 9.063, 1.470, 1.015^{***}), および因子の解釈可能性を考慮し, 2因子とした。1つ目の集団において, 項目10の「○○では, 常に他のグループからの脅威を受けていると感じることが多い ($M=1.59, SD=0.81$)」は, 2つの因子に対して負荷量が.40以上であったため, 除外し, 再度, 因子分析を行った。その結果, 1つ目の集団のモデルの適合度は $\chi^2(64) = 106.549, p < .01, CFI = .881, RMSEA = .131, BIC = 230.022$ であった (Table 3)。2つ目の集団のモデル適合度は, $\chi^2(76) = 122.762, CFI = .907, RMSEA = .128, BIC = 257.638$ であった (Table 4)。因子間

Table 3. 1つ目の集団における外集団脅威尺度の因子分析

項目内容				I	II	共通性
		<i>M</i>	<i>SD</i>			
状況認知・現実的脅威 ($\alpha = .92$)						
状況認知 3	自分のグループと他のグループの間には勝ち負けが存在する	2.39	1.55	1.043	-.161	.972
状況認知 4	自分のグループと他のグループには勝ち負けがないような関係である (逆転項目)	2.28	1.32	.832	-.285	.574
現実的脅威 6	○○にいますと, 他のグループが自分たちを負かそうとする状況になることが多い	1.87	1.08	.815	.128	.768
現実的脅威 7	○○では, グループ全体の勝ち負けを考えることが多い	2.09	1.23	.807	.127	.754
現実的脅威 8	○○にいますと, 他のグループが何かしら自分たちと張り合ってくると思うことが多い	2.11	1.25	.770	.206	.769
現実的脅威 5	自分のグループが他のグループの脅威になっている	2.09	1.20	.731	.200	.697
状況認知 1	グループの目的の達成に向けてグループ内のメンバーと協力して, 他のグループと競争したりすることがある	3.04	1.45	.603	.036	.384
状況認知 2	自分のグループと他のグループが互いに不満を抱くようなやりとりをする関係にある	2.04	0.99	.371	.156	.210
象徴的脅威 ($\alpha = .82$)						
象徴的脅威 12	○○グループの価値観は他のグループに受け入れられない	1.69	0.72	.050	.740	.582
象徴的脅威 11	○○グループの価値観を他のグループが否定してくる	1.67	0.78	-.146	.739	.477
象徴的脅威 15	他のグループの人たちが, 自分たちの価値観を押し付けてくる	1.59	0.79	.066	.690	.519
象徴的脅威 13	○○グループの価値観と他のグループの価値観は反するものである	2.02	1.02	-.031	.603	.349
象徴的脅威 14	○○グループにとって重要な価値観であるにもかかわらず, 他のグループの人たちが価値観を変えようとしてくる	1.65	0.83	.079	.595	.401
現実的脅威 9	○○では, グループの掲げる目的が, 他のグループに邪魔されたり, 妨げられたりすることが多い	1.69	0.95	.234	.520	.427
				因子寄与	5.573	3.921

Table 4. 2つ目の集団における外集団脅威尺度の因子分析

項目内容				I	II	共通性
		M	SD			
象徴的脅威 ($\alpha = .94$)						
象徴的脅威 15	他のグループの人たちが、自分たちの価値観を押し付けてくる	1.81	1.12	1.069	-.213	.914
象徴的脅威 14	〇〇グループにとって重要な価値観であるにもかかわらず、他のグループの人たちが価値観を変えようとしてくる	1.67	0.93	.940	-.026	.854
現実的脅威 10	〇〇では、常に他のグループからの脅威を受けていると感じることが多い	1.94	1.23	.853	.102	.842
象徴的脅威 11	〇〇グループの価値観を他のグループが否定してくる	1.85	1.07	.794	.099	.735
現実的脅威 9	〇〇では、グループの掲げる目的が、他のグループに邪魔されたり、妨げられたりすることが多い	1.78	0.98	.691	.133	.606
象徴的脅威 12	〇〇グループの価値観は他のグループに受け入れられない	1.69	0.91	.658	.136	.559
象徴的脅威 13	〇〇グループの価値観と他のグループの価値観は反するものである	2.02	1.07	.641	.090	.488
現実的脅威 8	〇〇にいと、他のグループが何かしら自分たちと張り合ってくると思うことが多い	2.09	1.34	.557	.306	.609
状況認知 2	自分のグループと他のグループが互いに不満を抱くようなやりとりをする関係にある	1.80	1.05	.510	.315	.551
状況認知・現実的脅威 ($\alpha = .87$)						
状況認知 3	自分のグループと他のグループの間には勝ち負けが存在する	1.89	1.27	-.068	.981	.887
現実的脅威 7	〇〇では、グループ全体の勝ち負けを考えることが多い	1.89	1.16	.138	.765	.731
状況認知 4	自分のグループと他のグループには勝ち負けがないような関係である(逆転項目)	2.54	1.61	-.045	.582	.310
状況認知 1	グループの目的の達成に向けてグループ内のメンバーと協力して、他のグループと競争したりすることがある	2.28	1.39	.135	.569	.434
現実的脅威 5	自分のグループが他のグループの脅威になっている	1.94	1.22	.465	.473	.705
現実的脅威 6	〇〇にいと、他のグループが自分たちを負かそうとする状況になることが多い	1.74	0.91	.467	.470	.702
				因子寄与	8.033	6.245

相関は1つ目の集団が.421、2つ目の集団が.600であった。1つ目の集団の場合、概ね競争的な状況認知と現実的な脅威(8項目)と象徴的な脅威(6項目)の2つの因子から構成されるモデルになった。2つ目の集団の場合、1つ目の集団と同じく2因子には分かれたが、象徴的脅威、現実的脅威、状況認知の項目が混在する結果となった。両集団ともに2因子構造には分かれたが、因子負荷量が1を超える項目もあり、モデルの適合度の基準をRMSEAが.05以下、CFIが.95以上とした場合、いずれもモデルも十分な適合度が得られたとは判断できなかった。

仮説の検討 外集団脅威と同一化に関連があるか否かを検討するため、尺度間で総当たりの相関係数を算出した (Table 5)。1つ目の集団では、同一化と相互依存性、外集団脅威と外集団嫌悪、2つ目の集団では、相互依存性と外集団嫌悪に正の相関関係が見られた ($p < .05$)。しかし、両集団ともに外集団脅威と同一化の間には有意な相関関係が見られなかった。したがって、外集団脅威がSITの心理メカニズムの影響力を強めるという仮説は支持されなかった。

集団性質による分類 外集団脅威を経験しやすい脅威集団と非脅威集団を選出するために、ユークリッド距離・ウォード法によるクラスタ分析を実施した。デンドログラムと解釈可能性を考慮し、1つ目の集団では6クラスタ、2つ目の集団では12クラスタを抽出した⁵⁾。集団の各ク

Table 5. 尺度間の総当たりの相関係数

1つ目	同一化	相互依存性	外集団脅威	外集団嫌悪
同一化				
相互依存性	.313*			
外集団脅威	.125	-.046		
外集団嫌悪	-.069	-.024	.399**	
外国人嫌悪	-.100	.025	.106	.088
2つ目	同一化	相互依存性	外集団脅威	外集団嫌悪
同一化				
相互依存性	.162			
外集団脅威	-.083	-.005		
外集団嫌悪	.153	.308*	.134	
外国人嫌悪	-.175	-.029	.106	.114

$p^{**} < .01$, $p^* < .05$

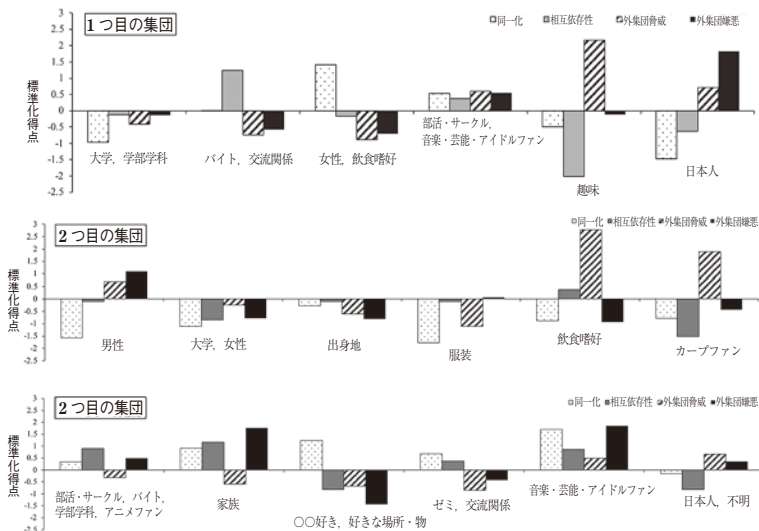


Figure 1. 各集団クラスタの標準化得点

ラスタにおける標準化得点を Figure 1 に示す。2 つ目の集団では各クラスタが $N=1$ の項目が多いことから、以下では 1 つ目の集団の性質のみを検討した。

クラスタの種類を独立変数、同一化、相互依存性、外集団脅威、外集団嫌悪得点を従属変数とした一要因分散分析をそれぞれ実施し⁶⁾、Holm 法による多重比較を行った。同一化では、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(5, 48)=6.65, p<.01, \eta_p^2=.41$)。同一化得点は、大学・学部学科 ($N=20, M=43.80, SD=8.35$)、バイト・交流関係 ($N=4, M=51.50, SD=5.20$)、女性・飲食嗜好 ($N=2, M=63.50, SD=0.71$)、部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン ($N=25, M=55.72, SD=6.55$)、趣味 ($N=2, M=48.00, SD=22.63$)、日本人 ($N=1, M=40.00$) であった。女性・飲食嗜好 ($p<.05$)、部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン ($p<.01$) はそれぞれ、大学・学部学科の同一化得点よりも高かった。相互依存性では、クラスタに有意な主効果が認められなかった ($F(5, 48)=1.65, p=.16, \eta_p^2=.15$)。相互依存性得点は、大学・学部学科 ($M=14.75, SD=3.06$)、バイト・交流関係 ($M=17.50, SD=3.00$)、女性・飲食嗜好 ($M=15.00, SD=1.41$)、部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン ($M=15.88, SD=2.62$)、趣味 ($M=11.00, SD=7.07$)、日本人 ($M=14.00$) であった。外集団脅威では、クラスタに有意な主効果が認められた ($F(5, 48)=6.19, p<.01, \eta_p^2=.39$)。外集団脅威得点は、大学・学部学科 ($M=24.15, SD=8.85$)、バイト・交流関係 ($M=22.25, SD=3.86$)、女性・飲食嗜好 ($M=20.00, SD=1.41$)、部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン ($M=34.40, SD=9.75$)、趣味 ($M=50.50, SD=6.36$)、日本人 ($M=36.00$) であった。部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン、趣味はそれぞれ、大学・学部学科の外集団脅威得点よりも高かった ($ps<.01$)。趣味の外集団脅威得点は、バイト・交流関係 ($p<.01$) や女性・飲食嗜好 ($p<.05$) よりも高かった。外集団嫌悪では、クラスタに有意な主効果が認められなかった ($F(5, 48)=0.67, p=.65, \eta_p^2=.07$)。外集団嫌悪得点は、大学・学部学科 ($M=10.95, SD=2.76$)、バイト・交流関係 ($M=10.25, SD=1.50$)、女性・飲食嗜好 ($M=9.50, SD=3.54$)、部活／サークル・音楽／芸能／アイドルファン ($M=11.48, SD=3.81$)、趣味 ($M=11.00, SD=1.41$)、日本人 ($M=16.00$) であった。以上の結果と人数を考慮し、脅威集団に「日本人(国)」, 「音楽・芸能・アイドルファン」, 「部活・サークル」, 非脅威集団に「大学」を選出した。

考察

研究 1 の目的は、外集団脅威尺度を使用して脅威集団と非脅威集団を選出するために、各集団の性質を検討することであった。まず、外集団脅威尺度の探索的因子分析を行った結果、2 因子それぞれでの信頼性は十分に高いものの、モデルの適合度は十分ではなかった。これは、任意の集団を想定して回答するという実験デザイン上の限界であり、十分なサンプルサイズが得られなかったことが原因であると考えられる。また、外集団脅威と同一化との間にも有意な相関関係が見られなかった。しかし、参加者の所属集団の種類が様々であったことやサンプルサイズの小さ

さを踏まえ、外集団脅威と同一化には関連がないと結論づけるのは早計である。研究1の結果から、脅威集団として「国」、「音楽ファン」、「部活・サークル」、非脅威集団に「大学」を選定した。研究2では、研究1で選出した脅威集団と非脅威集団を対象に外集団脅威尺度の因子的妥当性を検討した上で、仮説の再検証を行う。

研究 2

方法

参加者及び手続き 本調査は2021年5月14日から5月21日にSonaシステムを使用して行われた(Qualtricsで作成したWeb調査)。データの使用に同意しない男性1名を削除し、分析には広島県内の大学生106名(男性58名,女性47名,不明1名;平均年齢19.49±1.12歳)のデータを使用した。国及び大学は106名全員,音楽ファンは71名(男性36名,女性34名,不明1名:ほぼ欠損値の1名を削除),部活・サークルは56名(男性31名,女性25名)が回答した。参加者には謝礼としてコースクレジットを付与した。

質問項目 国, 大学, 音楽ファン, 部活・サークルそれぞれに対して以下の項目を5件法で回答した(1. 全くそう思わない~5. 非常にそう思う)。研究1と同様の尺度である集団同一化,

Table 6. 集団別の同一化, 相互依存性, 外集団脅威の合計平均と標準偏差

	同一化		相互依存性		外集団脅威	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
国 (<i>N</i> = 106)	47.08	11.01	14.63	3.26	40.05	13.46
大学 (<i>N</i> = 106)	41.81	10.15	13.26	3.59	29.35	12.39
音楽ファン (<i>N</i> = 70)	46.30	11.36	13.16	4.03	30.28	13.69
部活・サークル (<i>N</i> = 56)	44.64	12.83	14.02	3.58	32.80	14.89

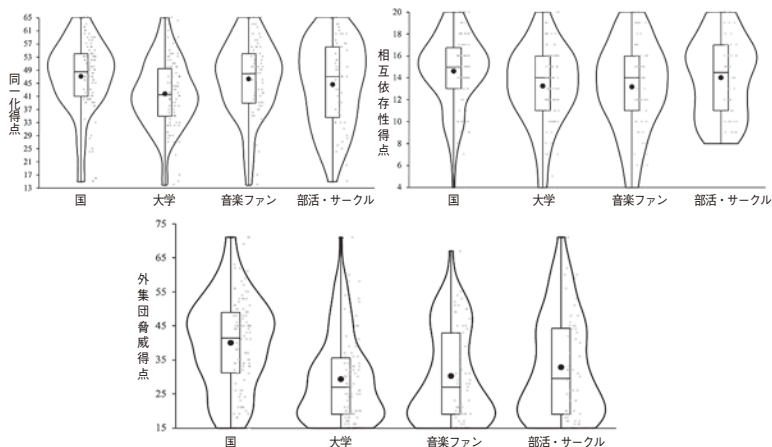


Figure 2. 集団別のヴァイオリンプロット (同一化, 相互依存性, 外集団脅威)

Table 7. 国（脅威集団）における外集団脅威尺度の因子分析

項目内容			I	II	共通性	
現実的・象徴的脅威 ($\alpha = .95$)		<i>M</i>	<i>SD</i>			
象徴的脅威 11	〇〇グループの価値観を他のグループが否定してくる	2.46	1.19	.952	-.094	.786
象徴的脅威 14	〇〇グループにとって重要な価値観であるにもかかわらず、他のグループの人たちが価値観を変えようとしてくる	2.47	1.25	.949	-.085	.791
象徴的脅威 12	〇〇グループの価値観は他のグループに受け入れられない	2.40	1.18	.897	-.136	.646
象徴的脅威 15	他のグループの人たちが、自分たちの価値観を押し付けてくる	2.47	1.20	.869	-.045	.700
象徴的脅威 13	〇〇グループの価値観と他のグループの価値観は反するものである	2.50	1.17	.822	-.104	.562
現実的脅威 9	〇〇では、グループの掲げる目的が、他のグループに邪魔されたり、妨げられたりすることが多い	2.54	1.24	.675	.214	.711
現実的脅威 10	〇〇では、常に他のグループからの脅威を受けていると感じることが多い	2.54	1.28	.648	.235	.697
現実的脅威 8	〇〇にいと、他のグループが何かしら自分たちと張り合ってくると思うことが多い	2.70	1.28	.576	.337	.726
現実的脅威 7	〇〇では、グループ全体の勝ち負けを考えることが多い	2.82	1.31	.470	.282	.493
状況認知 ($\alpha = .85$)						
状況認知 2	自分のグループと他のグループが互いに不満を抱くようなやりとりをする関係にある	2.85	1.27	.032	.772	.632
現実的脅威 5	自分のグループが他のグループの脅威になっている	2.41	1.19	.090	.746	.662
状況認知 1	グループの目的の達成に向けてグループ内のメンバーと協力して、他のグループと競争したりすることがある	3.42	1.29	-.272	.738	.326
状況認知 3	自分のグループと他のグループの間には勝ち負けが存在する	2.93	1.23	.090	.735	.644
現実的脅威 6	〇〇にいと、他のグループが自分たちを負かそうとする状況になることが多い	2.46	1.15	.319	.496	.579
		因子寄与	7.625	6.287		

相互依存性、外集団脅威、フェイスシート（年齢、学年、性別）である。研究1で外集団嫌悪、外国人嫌悪尺度の信頼性が低かったことから、研究2では除外した。国と大学は必須回答であり、音楽ファン、部活・サークルは該当者のみが回答した。質問項目の「〇〇」には参加者の国籍、大学名、ファンである音楽グループ名、部活・サークル名がそれぞれ当てはまる。各集団の回答順序はランダム化されていた。

結果

まず、各尺度のクロンバックの α 係数を算出したところ、十分な内的整合性が得られたため、

Table 8. 大学（非脅威集団）における外集団脅威尺度の因子分析

項目内容				I	II	共通性
		M	SD			
現実的・象徴的脅威 ($\alpha = .97$)						
象徴的脅威 15	他のグループの人たちが、自分たちの価値観を押し付けてくる	1.68	1.01	1.098	-.271	.887
象徴的脅威 14	〇〇グループにとって重要な価値観であるにもかかわらず、他のグループの人たちが価値観を変えようとしてくる	1.60	0.90	1.048	-.211	.851
象徴的脅威 11	〇〇グループの価値観を他のグループが否定してくる	1.65	0.98	1.045	-.160	.897
象徴的脅威 12	〇〇グループの価値観は他のグループに受け入れられない	1.66	0.91	.966	-.063	.858
現実的脅威 10	〇〇では、常に他のグループからの脅威を受けていると感じることが多い	1.69	0.98	.889	-.011	.777
象徴的脅威 13	〇〇グループの価値観と他のグループの価値観は反するものである	1.84	1.01	.882	-.139	.637
現実的脅威 9	〇〇では、グループの掲げる目的が、他のグループに邪魔されたり、妨げられたりすることが多い	1.74	0.96	.861	.094	.858
現実的脅威 6	〇〇にいと、他のグループが自分たちを負かそうとする状況になることが多い	1.77	1.04	.772	.208	.850
現実的脅威 8	〇〇にいと、他のグループが何かしら自分たちと張り合ってくると思うことが多い	1.92	1.08	.620	.269	.677
現実的脅威 7	〇〇では、グループ全体の勝ち負けを考えることが多い	2.06	1.21	.618	.261	.662
現実的脅威 5	自分のグループが他のグループの脅威になっている	1.90	1.09	.500	.492	.815
状況認知 ($\alpha = .74$)						
状況認知 3	自分のグループと他のグループの間には勝ち負けが存在する	2.11	1.18	.141	.788	.786
状況認知 1	グループの目的の達成に向けてグループ内のメンバーと協力して、他のグループと競争したりすることがある	2.94	1.29	-.084	.644	.350
状況認知 4	自分のグループと他のグループには勝ち負けがないような関係である（逆転項目）	2.71	1.34	-.301	.530	.161
状況認知 2	自分のグループと他のグループが互いに不満を抱くようなやりとりをする関係にある	2.08	1.12	.451	.486	.727
				因子寄与	9.573	5.931

全項目それぞれを合算し、同一化得点（国： $\alpha=.93$ ，大学： $\alpha=.92$ ，音楽ファン： $\alpha=.92$ ，部活・サークル： $\alpha=.96$ ），相互依存性得点（国： $\alpha=.66$ ，大学： $\alpha=.73$ ，音楽ファン： $\alpha=.76$ ，部活・サークル： $\alpha=.72$ ），外集団脅威得点（国： $\alpha=.94$ ，大学： $\alpha=.95$ ，音楽ファン： $\alpha=.93$ ，部活・サークル： $\alpha=.95$ ）とした。Table 6 に集団別の同一化，相互依存性，外集団脅威得点の合計平均と標準偏差を示し，Figure 2 にヴァイオリンプロットを示す。脅威集団の一つと想定した国の外集団脅威は，大学 ($t(105)=8.52, p<.01, d=0.83$)，音楽ファン ($t(66)=6.74, p<.01, d=0.72$)，部活・サー

Table 9. 尺度間の総当たりの相関係数

国	同一化	相互依存性
同一化		
相互依存性	.608*	
外集団脅威	.047	.069
大学		
同一化		
相互依存性	.616*	
外集団脅威	.019	.058
音楽ファン		
同一化		
相互依存性	.653*	
外集団脅威	.016	.139
部活・サークルファン		
同一化		
相互依存性	.782*	
外集団脅威	.068	.168

$p^* < .05$

クル ($t(55)=3.79, p<.01, d=0.63$) よりも有意に高かった。

因子分析 次に、尺度の因子構造を検討するため、脅威集団の国と非脅威集団の大学において探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。因子数は、国の固有値の減衰パターン（8.392, 1.420, 1.048***），及び因子の解釈可能性を考慮し，2因子とした。他の集団でも概ね2因子構造を仮定できる結果となった。国において，項目4の「自分のグループと他のグループには勝ち負けがないような関係である（逆転項目）（ $M=3.25, SD=1.12$ ）」は，因子負荷量と共通性が極端に低い値であったため，除外し，再度，因子分析を行った。その結果，国のモデルの適合度は $\chi^2(64)=150.020, p<.01, CFI=.917, RMSEA=.120, BIC=286.375$ であった（Table 7）。大学のモデル適合度は， $\chi^2(76)=153.089, CFI=.950, RMSEA=.105, BIC=299.543$ であった（Table 8）。因子間相関は国が.727，大学が.658であった。国の場合，概ね現実的・象徴的な脅威と状況認知の2因子構造であった。大学の場合も同様であった。研究1と因子数は同じであったが，研究2では下位因子として現実的・象徴的脅威が分かれることはなかった。さらに，研究1と同じく因子負荷量が1を超える項目があり，いずれのモデルも十分な適合度が得られたとは判断できなかった。

仮説の検討 外集団脅威と同一化との間に関連があるか否かを検討するため，尺度間で総当たりの相関係数を算出した（Table 9）。全ての集団で同一化と相互依存性との間に有意な正の相関関係が見られた（ $ps<.05$ ）。しかし，脅威集団と非脅威集団ともに外集団脅威と同一化の間には有意な相関関係が見られず，外集団脅威がSITの心理メカニズムの影響力を強めるという仮説

は支持されなかった。

考察

研究2の目的は、脅威集団と非脅威集団を対象に外集団脅威がSITの心理メカニズムの影響力を強めるか否かと尺度の因子的妥当性を検討することであった。その結果、外集団脅威尺度の信頼性は十分に高いことが示されたが、研究1と同じ2因子構造にはならず、下位因子として現実的・象徴的脅威に分かれることはなかった。また、研究1と同様に十分なサンプルサイズが確保できず、モデルの適合度も悪かった。研究2では、脅威集団の国が非脅威集団の3つの集団よりも外集団脅威得点が相対的に高いという結果が得られたが、各質問項目の平均値は概ね中点を超えていなかった。また、外集団脅威と同一化との間にも相関関係が見られなかった。したがって、脅威集団と非脅威集団の選出と外集団脅威尺度の妥当性を保証するには、分析に足る十分なデータを収集した上での再検討が必要である。

総合考察

研究1と2の結果から、実在集団における外集団脅威はSITの影響力を調整する要因であるとは言えないことが明らかになった。しかし、任意の集団を挙げる／参加者の所属する集団のみ回答するという調査方法や大学生を対象が限られていたことから、全ての研究において十分なサンプルサイズを確保できなかった。このことから、外集団脅威の影響力に関しては、検討の余地が残されているだろう。また、Stephan et al. (2016) は外集団脅威を現実的・象徴的脅威の2種類に分けているが、本研究においては下位因子として明確に分類されることはなかった。さらに、外集団脅威と同一化との間には有意な相関関係が見られず、脅威集団において各質問項目の平均値は概ね中点を下回っていた。したがって、今後の研究では、外集団脅威がSITの心理メカニズムに与える影響力を適切に検討するため、一般人を対象とした大規模なWeb調査を行う必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、助言をいただいた広島修道大学の横田晋大先生と中西大輔先生に感謝申し上げます。

注

- 1) 本研究は、JSPS 科研費（若手研究：20K14146）の助成を受けて行われたものである。また、

結果の一部は、日本社会心理学会第62回大会、日本心理学会第85回大会にて発表された(2021年)。

- 2) 外集団嫌悪の質問項目3では選択肢の記載ミスがあり、「非常にそう思う」が「非常そう思わない」になっていたが、他の項目と平均値や標準偏差が著しく異なることはなかった。
- 3) 外国人嫌悪尺度の α 係数は非常に低いが、先行研究では2因子構造を仮定していることと十分なサンプルサイズを確保できていないことが原因であると考えられる。
- 4) 研究1と2において、因子数を3に変更、回転法の変更、抽出法を最小二乗法へ変更しても結果が大きく変わることはなかった。
- 5) 任意の集団を挙げてもらったことから、各クラスタの人数には偏りがあり、1名から数名のクラスタが存在することに注意して解釈しなければならない。
- 6) クラスタの種類を独立変数、同一化、相互依存性、外集団脅威、外集団嫌悪得点を従属変数とした多変量分散分析でもクラスタに有意な主効果 ($F(1, 150)=3.34$, 多変量 $\eta^2=.70$, $p<.01$) が認められたことを確認した(分析はjamovi (The jamovi project, 2021)を使用)。

引用文献

- Böhm, R., Rusch, H., & Baron, J. (2020). The psychology of intergroup conflict: A review of theories and measures. *Journal of Economic Behavior & Organization*, 178, 947-962. <https://doi.org/10.1016/j.jebo.2018.01.020>
- Frindte, W., Funke, F., & Waldzus, S. (1996). Xenophobia and right-wing-extremism in German youth groups — Some evidence against unidimensional misinterpretations. *International Journal of Intercultural Relations*, 20(3-4), 463-478. [https://doi.org/10.1016/0147-1767\(96\)00029-6](https://doi.org/10.1016/0147-1767(96)00029-6)
- Grieve, P. G., & Hogg, M. A. (1999). Subjective uncertainty and intergroup discrimination in the minimal group situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(8), 926-940. <https://doi.org/10.1177/01461672992511002>
- 神信人・篠塚寛美(1996). 相互依存認知と協力傾向 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 154-155.
- 神信人・山岸俊男(1997). 社会的ジレンマにおける集団ヒューリスティクスの効果 社会心理学研究, 12(3), 190-198. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00003724741>
- Kaiser, C.R., & Pratt-Hyatt, J.S. (2009). Distributing prejudice unequally: Do whites direct their prejudice toward strongly identified minorities? *Journal of Personality and Social Psychology*, 96(2), 432-445. <https://doi.org/10.1037/a0012877>
- 清成透子(2002). 一般交換システムに対する期待と内集団ひいき—閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究— 心理学研究, 73(1), 1-9. <https://doi.org/10.4992/jpsy.73.1>
- 牧村洋介・山岸俊男(2003). 集団カテゴリーと集団間行動: 国籍カテゴリーを用いた実験研究 21世紀COE<心の文化・生態学的基盤>ワーキングペーパーシリーズ, No. 19, 1-19.
- 松井孝雄・水野りか(2013). 心理学学部教育へのコースクレジット制度の導入と評価 基礎心理学研究, 31(2), 198-201. <https://doi.org/10.14947/psychono.KJ00008685273>
- 三船恒裕・牧村洋介・山岸俊男(2007). 国籍カテゴリーを用いた「閉ざされた一般的互酬性仮説」の検証 21世紀COE<心の文化・生態学的基盤>ワーキングペーパーシリーズ, No. 68, 1-10.
- 中川裕美・横田晋大・中西大輔(2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討—広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験— 社会心理学研究, 30(3), 153-163. https://doi.org/10.14966/jssp.30.3_153
- 中川裕美・横田晋大・中西大輔(2018). 外集団の存在は互酬性の期待の効果を減じるか?—野球ファンを用いた場面想定法実験— 日本社会心理学会第59回大会発表論文集, 56.

- 中川裕美・横田晋大・中西大輔 (2019). 野球チームのファンの内集団協力に関する場面想定法実験—心理学研究, 90(1), 87-92. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17335>
- Nakagawa, Y., Yokota, K., & Nakanishi, D. (2021). Ingroup cooperation among Japanese baseball fans using the one-shot prisoner's dilemma game. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/1612197X.2021.1987963>
- R Core Team (2021). *R: A language and environment for statistical computing*. R foundation for statistical computing, Vienna, Austria. Retrieved from <https://www.R-project.org/>
- Rabbie, J.M. (1982). The effects of intergroup competition and cooperation on intragroup and intergroup relationships. In V.J. Derlega & J. Grzelak (Eds.), *Cooperation and helping behavior: Theories and research* (pp. 123-149). New York: Academic Press.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD —機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Stephan, W.G., & Stephan, C.W. (2017). Intergroup threats. In C.G. Sibley & F.K. Barlow (Eds.), *The Cambridge handbook of the psychology of prejudice* (pp. 131-148). Cambridge: Cambridge University Press.
- Stephan, W.G., Ybarra, O., & Rios, K. (2016). Intergroup threat theory. In T.D. Nelson (Ed.), *Handbook of prejudice, stereotyping, and discrimination* (2nd ed. pp. 255-278). New York: Psychology Press.
- Stroebe, K., Lodewijkx, H.F.M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and social identification as determinants of ingroup favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 831-845. <https://doi.org/10.1177/0146167204271659>
- Tajfel, H., Billig, M.G., Bundy, R.P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1(2), 149-178. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2420010202>
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of inter-group relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W.G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations* (pp. 7-24). Chicago, IL: Nelson-Hall.
- Terry, D.J., & O'Brien, A.T. (2001). Status, legitimacy, and ingroup bias in the context of an organizational merger. *Group Processes & Intergroup Relations*, 4(3), 271-289. <https://doi.org/10.1177/1368430201004003007>
- The jamovi project (2021). *jamovi*. (Version 2.2). Retrieved from <https://www.jamovi.org>.
- van der Veer, K., Ommundsen, R., Yakushko, O., Higler, L., Woelders, S., & Hagen, K.A. (2013). Psychometrically and qualitatively validating a cross-national cumulative measure of fear-based xenophobia. *Quality & Quantity*, 47(3), 1429-1444. <https://doi.org/10.1007/s11135-011-9599-6>
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63(2), 116-132. <https://doi.org/10.2307/2695887>
- Yamagishi, T., Makimura, Y., Foddy, M., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow, M.J. (2005). Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. *Asian Journal of Social Psychology*, 8(2), 173-190. <https://doi.org/10.1111/j.1467-839x.2005.00165.x>
- 横田晋大・結城雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性—内集団ひいきの生起過程の多重性—心理学研究, 80(3), 246-251. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.80.246>